The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	マーシャル諸島のコミュニティ映画 ： ミクロネシアの波を世界へ
Author(s)	小杉, 世
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2021, 2020, p. 51-63
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/85001
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

マーシャル諸島のコミュニティ映画[1]

――ミクロネシアの波を世界へ――

小 杉　世

1．はじめに

マーシャル諸島の首都マジュロ (Majuro) のメインストリートにある大手雑貨店 EZ Price Mart の片隅に Microwave Films の映画の DVD シリーズがおかれている。2008 年に設立された Microwave Films は、監督・プロデューサーの Jack Niedenthal によれば「ミクロネシアの波」を意味する名称で、映画の最初には黒画面に水色のプロダクション名のロゴが現れ、文字のうねりに合わせて、波の音と電子レンジのチーンという音が流れる。海に囲まれたミクロネシアのマーシャル諸島から新しい波（たとえ小さな波でも）を発信するという壮大な意図と、電子レンジから連想される日常性、マーシャル諸島の日常生活に密着した映画というイメージをあわせ持つこの名称は、Niedenthal の映画の真髄を表している。

Niedenthal が映画制作を始めたきっかけのひとつは、レンタルビデオ・コーナーの棚を見ていた 11 歳の息子が「どうしてマーシャル諸島には子供のための映画がないの？」と尋ねたことだという。[2] 棚に並んでいるのはハリウッドのアクション映画ばかりだったからだ。ペンシルベニア州生まれのアメリカ人 Jack Niedenthal[3]は 1981 年に Peace Corps のボランティア隊員としてナム環礁 (Namu Atoll) に赴任し、1984 年から 1986 年には、冷戦期の核実験でビキニ環礁から強制移住となったマーシャル人たちの居住地であるキリ島 (Kili Island) の小学校で教鞭をとりながら、ビキニ自治体 (Bikini Council) と関わりをもち、1987 年から 2016 年まで、Kili/Bikini/Ejit のビキニ自治政府の渉外担当 (Trust Liaison) を務めた。ビキニアンであるマーシャル人女性と結婚して、2000 年にはマーシャル諸島政府から名誉市民権を付与され、現在はマジュロ郊外に在住している。マーシャル諸島政府機関と教育機関の職を経て、2019 年 1 月からは保健省 (Ministry of Health and Human Services) の要職につき、

---

[1] マーシャル諸島のコミュニティ映画の存在を知らせてくれた国立民族学博物館共同研究（放射線影響をめぐる「当事者性」に関する学際的研究、2015 年 10 月～2019 年 3 月）の研究代表者、中原聖乃さんにお礼を申し上げたい。本稿は JSPS 科研費（基盤 B、20H01245、代表：松永京子）の助成を受けている。

[2] "Film Threat Interview in March of 2010 with Jack Niedenthal regarding Microwave Films and making movies in the Marshall Islands" https://www.microwavefilms.org/FilmThreatInterview.pdf.

[3] Jack Niedenthal の経歴と作品情報は https://www.microwavefilms.org/host.html 参照。

現在は新型コロナ感染症対策の最中である。[4] 筆者が面会したのは、Niedenthal が保健省勤めとなって間もない 2019 年 3 月であった。[5] ビキニ人のコミュニティが自らの親族でもある Niedenthal は、長らくビキニ自治政府のために働くなかで、マーシャル人の抱える健康問題の実態にふれ、保健省のポストをめぐるインタビューでは、最初の 1 問に対して、このポストへの並々ならぬ思い入れを 35 分間しゃべり通したという。

Microwave Films は、マーシャル諸島のきわめて日常的な生活と密着した映画を低コストで制作してきた。映画の制作に重要な役割を果たす共同監督者 Suzzane Chutaro は、マーシャル諸島で有名な沖縄からの日系人移民、具志忠太郎（核実験後のビキニ島への島民帰還の際に安全性に疑問を提示したことでも知られる[6]）の孫の伴侶となったマーシャル人である。Niedenthal の息子たちや娘、孫たち、妻の親族が多く制作に関わっており、出演者たちはプロの俳優ではなく、それぞれに本業をもつアマチュアで、仕事や学校が終わったあとの時間と週末を最大限に利用して撮影と編集を行っている。スタジオがあるわけでもなく、町の建物や学校、Niedenthal 自身の住居など、実際の日常生活の場で、Niedenthal 自身と息子・娘が撮影している。[7] 元ビキニ自治体長（ビキニ市長 Mayor of Bikini Atoll の称号で呼ばれる）で青少年のカヌー・プロジェクトを率いる Alson Kelen、マジュロのビキニ市庁舎 (Bikini Atoll Town Hall) の職員など、映画に描かれるコミュニティに深い関わりをもつ人々が俳優として登場し、映画中に何度も映る EZ Price Mart はじめ、商店やバーやカフェ、ホテル、教会、学校その他の公共の建物は、マジュロ、エジット島 (Ejit)、イバイ島 (Ebeye) に在住するマーシャル人たちが日常出入りする場所、目にする光景である。

メラネシアを例にとれば、1989 年にヴァヌアツ共和国の小さなコミュニティ・シアターから始まった Wan Smolbag Theatre は、現代のヴァヌアツ社会が抱える健康や環境の問題について啓蒙的な演劇や映画作品を制作し、障がい者や LGBTQI のグループ活動、環境運動、医療啓蒙活動を行い、とくに *Love Patrol* という英語の連続テレビドラマは国内のみならず、フィジー、ニュージーランドその他のオセアニア諸国において広く放映された。[8] この劇団

---

[4] 現在国境閉鎖中のマーシャル諸島ではクワジェリン島の米軍基地関係者 4 名を除き COVID-19 陽性者は出ていない（2021.4.19 時点）が、アメリカ在住マーシャル人コミュニティの感染者数と死者数の多さが報告されている（"COVID-19 Disparities Among Marshallese Pacific Islanders" *Preventing Chronic Disease*, vol. 18, January 7, 2021, DOI: http://dx.doi.org/10.5888/pcd18.200407)。Niedenthal によれば、RMI 国内での 18 歳以上のワクチン接種は 2021 年 1 月から開始。4 月 19 日時点でのマジュロ環礁・クワジェリン環礁の都市部の 18 歳以上のワクチン接種完了率は 61%、4 月上旬からは離島でのワクチン接種も進んでいる（https://www.facebook.com/rmimoh/)。

[5] 本稿で引用する Niedenthal の言葉は、とくに出典の表記のないものは、2019 年 3 月マジュロでの対面インタビューと論文執筆時における Niedenthal とのメールでの通信に基づく。

[6] 前田哲男『棄民の群島――ミクロネシア被爆民の記録』時事通信社、1979 年、pp.205-209 参照。

[7] Niedenthal によれば、病院以外はすべて実際の場で撮影している。*Lañinbwil's Gift* の Liki の弟の kemem パーティーは Niedenthal の初孫の kemem の際に撮影したという（kemem は 1 歳の誕生日を盛大に祝うマーシャル諸島の伝統的な習慣）。

[8] Wan Smolbag Theatre については、小杉世「オセアニアにおける演劇とコミュニティ――ニュージーランド、フィジー、ヴァヌアツを中心に」『言語文化共同研究プロジェクト 2011：ポストコロニアル・フォーメーションズ VII』大阪大学大学院言語文化研究科、2012、pp.61-72 参照。

も戯曲の台本やスクリプトを書いているのは長年ヴァヌアツに在住するイギリス人 Jo Dorras であり、役者たちは地元のヴァヌアツ人である。

Wan Smolbag Theatre が 120 人を超える専属とアルバイトのスタッフ[9]からなる NGO として雇用も生み出しているのに対して、Microwave Films は、コミュニティ・シアターの概念に基づいたアマチュアのボランティアによる制作を行っている。[10] マーシャル諸島で撮影された、マーシャル人の役者たちによる、マーシャル語（英語字幕付）の、マーシャル人のための映画であるが、同時にマーシャル諸島の外の世界にもその波を発信している。現在、マーシャル諸島の人口 53,158 人 (EPPSO 2011 Census) に対して、アメリカには 3 万人を超えるマーシャル人が在住するが、[11] Microwave Films の映画は、米国アーカンソー州やワシントン州、ハワイなど国外在住のマーシャル人コミュニティでも広く受容され、国外の映画祭などを通して、マーシャル人コミュニティの外の世界の観客にも共有されている。

マーシャル諸島で初めての長編映画となった Aaron Condon と Michael Cruz 監督の *Morning Comes So Soon* (2008) は、マーシャル人青年と中国人移民の少女との恋愛を描き、人種差別や青少年の自殺といった社会問題をとりあげて、マーシャル人青年の視点からマジュロの日常を描いた作品と評されている。[12] Niedenthal の映画もまたマーシャル諸島の歴史と現在の諸問題を描いているが、人口の半分以上が 15 歳未満であるマーシャル諸島においては、もっと幼い世代の子供たちも関わっていけるような映画の制作が必要であり、自分たちの文化や日常が映画にとりあげられる価値のあるものだと子供たちが知ることの意味は大きいと Niedenthal は考える。[13]

本稿では、Niedenthal の初期 3 部作におけるマーシャル諸島の伝説の扱いと社会的弱者に対するまなざし、そして、歴史的なテーマを扱いさまざまな賞を受賞した *Ainikien Jidjid ilo Boñ: The Sound of Crickets at Night* (2021)、気候変動をテーマとして国際的なメッセージを発した *Jilel: The Calling of the Shell* (2014)とその後の作品をとりあげ、[14] マーシャル人のコミュニティのなかで共有される波、またその外へと伝わる波について考察する。

２．初期３部作：*Ña Noniep, Yokwe Bartowe , Lañinbwil's Gift*

初期 3 部作である *Ña Noniep: I Am the Good Fairy* (2009)、*Yokwe Bartowe* (2010)、*Lañinbwil's Gift* (2011) は、いずれもマジュロが舞台である。共通して登場するいくつかの家族があり、

---

[9] https://www.wansmolbag.org/our-story/ (accessed 31 March 2021).

[10] Film Threat Interview of March 2010, https://www.microwavefilms.org/FilmThreatInterview.pdf. ボランティアを基本とするが、収益が生じた場合は出演者に後で分配することもあるという。

[11] Kees van der Geest, et al., "Marshallese perspectives on migration in the context of climate change" *Migration, Environment and Climate Change: Policy Brief Series*, issue 1, vol. 5, July 2019, p.3. https://collections.unu.edu/eserv/UNU:7422/VanderGeest_etal_2019_Marshall_Islands.pdf.

[12] Greg Devorak, "Review: *Morning Comes So Soon* by Aaron Condon and Mike Cruz" *The Contemporary Pacific*, vol. 21, no. 2, 2009, pp. 404-406.

[13] 脚注 10 参照。

[14] Microwave Films の映画は HP (https://www.microwavefilms.org/) に掲載の Vimeo サイトから電子版の購入・レンタルが可能である。短編映画は Vimeo、YouTube で無料視聴ができる。

それぞれの話がつながっているため、この町に住む現実の家族の物語を観ているかのような感覚を観客は覚える。呪詛をかける能力を持つことで町の人々から恐れられている呪術師 Lijimu が登場する初期 3 部作を Niedenthal は "Lijimu Trilogy" と呼ぶ。第 1 作と第 3 作は、マーシャル諸島の伝説の妖精 Noniep が活躍する物語であり、*Yokwe Bartowe* に登場する人の不幸を願う kwolej（Pacific golden plover=チドリ科の渡り鳥）の精や、*Lañinbwil's Gift* の妊婦にとりつく悪霊 Mejenkwaad など、超自然的な存在が物語の展開に重要な役割を果たしている。また、これらの作品には、幼い娘を亡くした悲しみから立ち直れない母親や、立派な息子を交通事故で亡くし、その深い悲しみゆえに理不尽な憎しみを心に抱く呪術師 Lijimu など、肉親の死がもたらす不幸がしばしば物語の核心にある。第 1 作ではその不幸のしがらみから、Lijimu と彼女が呪いをかけた少年 Liki を解放するのは、人助けの妖精 Noniep であり、第 2 作では、少女の死（行方不明）で崩壊した家庭を救うのは、呪詛ではなく人助けに呪術を使うことで心の平安を取り戻した Lijimu である。第 3 作では、Lijimu と Noniep の両者が問題の解決に関わっている。不幸に転落していく孤独な人間のまわりに Noniep が寄り添っており、家を勘当され、酒に酔う兄を、鳥に姿を変えられて見守る溺死したとされる妹、姿が見えなくなった少女の存在を感じ、時々その声を聴くように感じる幼い親友など、これらの作品には目に見えない存在が人間をとりまく状況が描かれる。呪術や超自然的な存在の介入によって物語が展開するが、そこに描かれるのは、抗えない力に翻弄される人間の生、人間の才能や知恵が個人のものでなく、世代から世代へ受け継がれていくこと、全く他人と思える存在と自分の運命がつながっていること、同じ力や能力が悪にも善にもなること、肉親の死が人の心にもたらす深い悲しみと不幸といった普遍的なテーマ、そして、行き場を失った青少年のアルコール依存などの社会問題である。

第 1 作 *Ña Noniep: I am the Good Fairy* の主人公は、Majuro Cooperate School に通う 13 歳の優等生の少年 Liki とそのクラスメイトで歌をつくる才能に恵まれた少女 Miko である。2 人は親友同士であったが、ある日、Miko の父親の運転する車が、Liki の父親が運転する大型トラックと衝突事故を起こし、Miko は両親と弟を亡くす。Miko の祖母である呪術師 Lijimu は、最愛の息子とその家族を失い、Liki の父親を憎み、Liki の生命を呪詛で奪おうとする。優等生だった Liki は精神状態が錯乱し、売店から盗んだ金でアルコールとタバコを買い、路上で泥酔状態で見つかり、その後も夜に家から抜け出しては錯乱状態で遠方まで夜通しさまよい歩く。人助けの妖精 Noniep は、Liki の家族を助けようと、毎日、魚をそっと戸口においていき、Liki のあとをついてまわるが、どうしてよいかわからない。Niedenthal の描く幼い妖精 Noniep は決して万能ではなく、同時に 2 人以上の人間に姿を見られると死んでしまうという弱みをもち、Lijimu のような熟達した呪術師には力が及ばない。途方にくれた Noniep は、ヤシガニの精霊を呼び出して相談するが、ヤシガニは答えを教えてはくれず、Noniep は自らに与えられた知恵をめぐらせ、大人の世界の憎しみが絡んだ人間関係をときほぐす解決法を自分の力で考えなくてはならない。「マーシャル諸島で初めての子供のための映画」と Niedenthal が呼ぶこの作品は Noniep の成長物語でもあり、子供が能動的な役割

を担う映画となっている。Noniep は辛抱強く機会を待って Liki に姿を現し、若い 2 人の互いを思う愛情と孫娘に対する祖母 Lijimu の愛情を利用して、Lijimu を彼女の力の陣地から引き離し、彼女のなかに巣くっていた憎しみの力から Lijimu を解放する。[15]

この作品は、2008 年に亡くなった 2 人のマーシャル人に捧げられている。マジュロの交通事故で重傷を負い 55 歳で亡くなったビキニ市長の Kataejar Jibas と、派兵先のイラクで亡くなった 26 歳のマーシャル人 Sgt. Solomon T. Sam である。ビキニ自治政府のために尽くした Kataejar Jibas の遺体が救急搬送先のフィリピンから戻ってきたときには、150 を超える車が空港から葬儀場の教会まで葬列をなしたという。[16] もう 1 人の死者はアメリカのためにイラクで従軍したマーシャル人である。[17] かつて核実験場として島を明け渡すことを要請されたビキニ環礁の島民たちはそれを「人類のため (for the good of mankind)」とみなすことを強いられたが、21 世紀にもマーシャル人たちはアメリカの定義する「正義」のために犠牲となっている。Lijimu が Liki とその家族に向ける理不尽な憎しみは、最愛の息子を亡くしたことの深い悲しみからくるものだが、人の心を蝕む恨みや憎しみや復讐は、決して解決や救いにならないことが、Lijimu の心の変化と解放を通して描かれる。

第 2 作の *Yokwe Bartowe* は、オープニングから流れるウクレレのメロディーと、哀調のある歌が映画の基調を形成している。[18] 主人公の 20 歳の青年 Bartowe の母親は、溺死したとされるが遺体も見つからない幼い娘 Lijiamao（マーシャル語で梟の意）の「死」を 1 年経っても受け入れられず、妹をちゃんと見守っていなかった Bartowe を責める。Bartowe はカレッジにも通わなくなり、酒に酔って家を勘当され、同じカレッジに通うガールフレンドの Kaila は Bartowe の子を身ごもっていたが、親戚のいる米国アーカンソー州に行ってしまう。Lijimu の家の前で、ギャングに殴られ倒れていた Bartowe を Lijimu が助け、鳥に姿を変えられ行方不明になっていた妹 Lijiamao を kwolej の精から解放して元の姿に戻し、Kaila を呪術の力でアーカンソー州から呼び戻す。

この映画では、前作では描かれなかった Lijimu の内面にも焦点があてられる。町の人たちから邪悪な老女と思われている Lijimu が交通事故で亡くした息子とその妻子の助けを求

---

[15] 映画の設定では、Lijimu は自分の家の土地から離れると呪術の力が弱まる。

[16] "The Life and Funeral of Hon. Bikinian Mayor Kataejar Jibas" (https://www.bikiniatoll.com/Kataejar Jibas Memorial Page.html). Accessed 31 March 2021.

[17] マーシャル諸島は合衆国との自由連合協定のもとにあり、マーシャル人はビザなしで米国に滞在し就労できる他、米軍に志願できる。多数のマーシャル人がイラク、アフガニスタンへ派兵されている ("Twelve New RMI Recruits Join the U.S. Army." U.S. Embassy in the Republic of the Marshall Islands, https://mh.usembassy.gov/twelve-new-rmi-recruits-join-the-u-s-army/)。Niedenthal によれば、高等教育を受ける経済的余裕のない多くのマーシャル人がアメリカの軍隊に志願するという。共同監督 Suzzane Chutaro の娘も米海軍に入隊している (Sgt. Tessa Watt, "Making History for Women and Marines at MCRD San Diego." Defense Visual Information Distribution Service, 19 March 2021, https://www.dvidshub.net/news/391886/making-history-women-and-marines-mcrd-san-diego)。

[18] オープニングのマーシャル語の歌は、Niedenthal によれば「鳥のように自由に飛び立ちたい」という内容の歌詞であり、妹を失い酒に浸る Bartowe が海岸をさまようシーンで流れる哀調のあるマーシャル語の歌は「離れ離れになった恋人たちが互いに会いたくて天に飛び立ちたい」という内容の歌詞である。妹を失った（後に恋人も失う）Bartowe の心情と歌詞が重なる。

める声に今も苛まれていること、呪術の力を人助けに転じることで心の平安を見出しつつある過程[19]が描かれ、Lijimu の話を聞く Bartowe の表情には、愛する家族を失った者同士の共感があらわれている。Niedenthal が説明するように映画のタイトルの Iokwe はマーシャル語の挨拶の言葉であると同時に、人の置かれた状況に対する憐れみや悲しみを表す言葉でもあり、英語タイトルは "Poor Bartowe" である。人と人との出会い、他人の話に耳を傾けることで生まれる共感がテーマとなっている。Tom Brislin は Bartowe の置かれた状況 ("the despair of the loss of home and family" 590) を核実験で故郷を失った島民たちの歴史的なトラウマのメタファー ("a metaphor for the historical trauma of Bikinians and the people of Eniwetok and Rongelap" 590) [20]と解するが、幼い少女を失った家族の悲しみは、マーシャル諸島の詩人 Kathy Jetñil-Kijiner の "Fishbone Hair"（白血病で亡くなった姪に捧げる詩）にも描かれるように、多くのマーシャル人が核被害を通して経験してきたものでもある。

Ña Noniep と *Yokwe Bartowe* は、悲しみから再び希望を見出す家族の物語であるが、Niedenthal は 2019 年 12 月と 2020 年 3 月の Nuclear Victims' Day に 2 作の無料視聴動画を公開している。[21] マーシャル諸島では 2019 年にデング熱とインフルエンザが流行し、同年 11 月には 200 人のマーシャル人が洪水のために避難を余儀なくされたこと、2020 年 3 月には、周辺国で感染が拡大する新型コロナ対策も必要となり、そのような状況のなかで、マーシャル諸島の人々に喜びを届けたいというメッセージが添えられている。気候変動は海水面上昇の問題だけでなく、洪水などの災害の多発によってデング熱などの感染症の流行をもたらすことを Niedenthal は指摘する。さらに現在の米国在住マーシャル人の COVID-19 による死亡率の高さは、基礎疾患をもつ人が多いことも関係する（注 4 文献参照）ことを考えれば、20 世紀以降のアメリカによる核軍事化がもたらした生活の変化の影響は大きい。[22]

3 作目の *Lañinbwil's Gift* は、1 作目に登場した天才少年 Liki と親友 Miko、2 作目に登場した Bartowe と恋人 Kaila の家族の話が絡んでおり、初期 3 部作のなかではプロットが最も複雑である。家族にも見放されて犬小屋のような小さな段ボール箱に住む知的障害をもつホームレスの少年 Lañinbwil と、第 1 作では脇役であった老人 Jacob との関係が物語の枠組みとなっている。Lañinbwil を見守り、ときどき食べ物を買ってやる Jacob は、少年だった頃、Lañinbwil のように知的障害があったが、Noniep に助けられ知恵を授かり、それを時期が来たら誰かに授け渡すという使命を負っている。Lañinbwil の所有物は、雑誌の付録の写真（オバマ大統領の写真など）をぎっしり貼り付けたねぐらの段ボール箱、壊れた電話無線子機とレンズのない眼鏡のみで、彼は EZ Price Mart で店主に追い出されるまでテレビを見てい

---

[19] 呪術師 Lijimu は教会に通うようになっている。この映画では Bartowe が何度も教会の十字架を見上げながら通り過ぎる場面があり、Bartowe は「今の自分には教会に居場所はない」と Lijimu に語る。「教会」は信仰の問題以上にコミュニティへの帰属の問題でもある。

[20] Tom Brislin, "Review: *Ainikien Jidjid ilo Boñ*, *Batmon vs Majuro*, *Jilel: The Calling of the Shell*, *Lañinbwil's Gift*, *Ña Noniep*, *Yokwe Bartowe*." *The Contemporary Pacific*, vol. 31, no. 2, 2019, pp. 588-593. Rich Carr の映画評もある（*The Contemporary Pacific*, vol. 23, no. 2, 2011, pp. 544-548）。

[21] https://vimeo.com/376689803 および https://www.youtube.com/watch?v=gsgSuhYurOA 参照。

[22] 中原聖乃研究ブログ「米国在住マーシャル人の深刻なコロナ感染状況について」2020.9 参照。

る。しばしば彼の脳裏には過去にテレビで見たと思われるアメリカの歴史や映画の断片（核実験の映像も含まれる）、彼自身の（あるいは他人の）記憶がジェットコースターのように駆け巡る。一方、アーカンソー州から戻り Bartowe の妻となった妊娠中の Kaila は、デーモン Mejenkwaad にとりつかれ、意識が戻らず弱っていく。Mejenkwaad は壊れた電話子機を通して Lañinbwil に接触し、Liki をしのぐ天才少年 Tao[23] に変身させて、Liki と Miko の仲を裂き、Lijimu の孫娘 Miko を破滅させようとする。自らの命を危険にさらして Bartowe を助ける Lijimu の働きで Kaila と Lañinbwil はデーモンから解放され、Lijimu も息を吹き返し、Noniep の導きで時が来たことを悟った Jacob は、Lañinbwil に自分のよき知恵を授け渡すと何も認識できなくなり、知恵と新しい生を授かった Lañinbwil は、Jacob の面倒をみる。

無関係に見える人間同士の生がつながっていることを描くこの映画には、社会的弱者に対するやさしいまなざしがみられる。また、この映画では、米国アーカンソー州などに移住した海外在住のマーシャル人の生活難についても Miko と Liki の会話を通してふれられる。Kaila にとりつくマーシャル諸島の伝説のデーモン Mejenkwaad（映画では Mejenkwar）は、赤子や人を食べる恐ろしい怪物として知られ、妊娠した女性を 1 人にすると Mejenkwaad になるという言い伝えがある。Kathy Jetñil-Kijiner が広島原爆ドームの前で録画した詩のパフォーマンス "Monster" は、自らの産後うつ病の体験に基づいて、jellyfish babies を生んだ核実験被爆者のマーシャル人女性たちの心情を想像し、Mejenkawaad の赤子を食べるという行為を赤子を胎内に戻そうとする行為と解している。[24] Niedenthal の映画では、マーシャル諸島の被爆の歴史との関連において Mejenkwaad の存在が扱われることはないが、「どうしてアメリカへ行かせたのか、妊婦を 1 人にしてはいけないのに」という Kaila を看病する老女の言葉は、拡大家族に見守られているマーシャル諸島での生活とアメリカでの移民生活の格差から生じる問題を示唆している。

３．*Ainikien Jidjid ilo Boñ: The Sound of Crickets at Night*

核実験でビキニ環礁から移住した家族が住むマジュロ環礁エジット島を舞台として老人 Jebuki[25] と孫娘 Kali の関係を描いた *Ainikien Jidjid ilo Boñ: The Sound of Crickets at Night* (2012) は、Microwave Films の円熟期の代表作である。この映画では、制作当時 Niedenthal の上司であったビキニ自治体長 Alson Kelen と共に Niedenthal 自身も重要な役割を演じている。主人公の少女 Kali とその妹 Mani は、実際にビキニアンの姉妹が演じており、祖父 Jebuki を演じるのは Niedenthal の妻の叔父である。エジット島の海岸に打ち上げられ、少女 Kali に発見されて George Bush と名づけられる記憶喪失のアメリア人（らしき男）を Niedenthal が演

[23] Tao はマーシャル諸島の伝説のトリックスターEtao (Letao) のように混乱をもたらす。

[24] 映像は https://vimeo.com/224211868 参照。Michelle Keown もこの詩に描かれるマーシャル諸島の女性のトラウマについて論じている。Keown, M 2019, "Waves of destruction: Nuclear imperialism and anti-nuclear protest in the indigenous literatures of the Pacific" *Journal of Postcolonial Writing*, vol. 54, no. 5, pp. 585-600 (DOI: 10.1080/17449855.2018.1538660) pp. 594-595 参照。

[25] Jebuki と Lañinbwil は、ビキニ首長の系譜にある名前である。Jack Niedenthal, *For the Good of Mankind: A History of the People of Bikini and their Islands*, 2nd Edition, Bravo Publishing, 2013, p.14.

じ、その本当の姿（分身）であるビキニ環礁の伝説の Worejabato (Reef God) を Alson Kelen が演じている。Niedenthal は著書で、ビキニ人から聴き取ったビキニ環礁の伝説について記録しているが、この映画に登場する Worejabato と結合双生児 Kwelik と Kweiar の伝説もその例である。Niedenthal がキリ島で聴き取ったビキニ伝説によれば、Worejabato は邪悪な力や侵入者から島を守ってくれる精霊で、その力は島人からも恐れられている。マーシャル諸島がキリスト教化された後も、Worejabato の "medicinal power" は民間信仰のなかに生き続けているという。[26]

この映画は核実験で故郷を失ったビキニアンの家族の物語である。[27] 主人公の少女 Kali と Mani の両親は顔を合わせると喧嘩ばかりで、姉妹は両親の喧嘩がはじまると家の外に出て、庭で祖父 Jebuki から亡くなった祖母の話、どうやって祖父母がエジット島へ来たのかを聞く。姉妹の父親はマジュロ環礁から離れた米軍基地のあるクワジェリン島に現金収入を得るため働きに行くことになり、母親は Kali の妹の Mani を連れて親戚のいる米国アーカンソー州に行ってしまう。Kali はエジット島に残って祖父の面倒をみることになり、家族は離散する。心臓を患い命が長くないことを感じている Jebuki は、母親や妹と離れ離れになった Kali を案じ、アメリカへの渡航費を工面しようとするがうまく行かず、父親から授かった Worejabato の力を呼び出す薬を最後の頼みとして Kali の額に塗る。それによって Worejabato が身元不明の記憶喪失の男の姿となり、Jebuki と Kali の元へやってくる。Jebuki は故郷のビキニ島で最期を迎えることを願うが叶わず、Worejabato は Jebuki の死とひきかえに Kali を救い、離散した家族を呼び戻して、姉妹の両親のよりを戻させる。

Andrew Jakeo . . . reluctant exile from Bikini who insisted on using his own canoe

PIM, Vol.49, No.11, p.11.

Jebuki が Worejabato の言葉に従って、眠っている孫娘にそっと別れを告げ、早朝の埠頭へ向かう場面では、1946 年にビキニ環礁を離れたとき島民の Lore Kessibuki が作曲した歌 (Bikini Anthem として現在も歌い継がれている) が老人の声で歌われる。Niedenthal の一連の映画のなかで最も心に深く響く場面である。「寝床の枕に身を横たえても、故郷の島を思い、もはや私の心は休まることがない。抑えがたい思いにかられ、悲しみのあまり私はもう心臓の鼓動を感じられない。私の魂は遠くへさまよい、大きな潮の流れに身をゆだねる、そのときはじめて心は安らぐ。」[28] 映画の表題の「コオロギの音」は、故郷のビキニ島で子供のころ母親と一緒に聞いたコオロギの音で、Jebuki は苦しくなったとき、いつも心を落ち着

---

[26] 同上、pp. 17-23 参照。

[27] Kali の祖父 Jebuki は Bikini→Rongerik→Kwajalein→Kili という強制移住のルートの後、ロンゲラップ島に移住し、そこで同じビキニアンの女性（Kali の祖母）に会う。Kali の祖父母はブラボ実験のときロンゲラップで被爆し、祖母は甲状腺癌で亡くなったという設定である。ビキニ環礁からの強制移住については黒崎岳大「ビキニアンの現在――核実験補償をめぐる戦いと社会経済開発」『パシフィックウェイ』136 号、太平洋諸島地域研究所、2010 年 8 月、pp.4-19 参照。

[28] 日本語訳筆者。マーシャル語と英語翻訳は https://www.bikiniatoll.com/anthem.html 参照。引用の日本語訳は、上記ウェブサイトの英語版ではなく、映画の字幕英語に基づく。

けるためにその音を思い出す。[29] 歌の歌詞のように遠い故郷を思う Jebuki は、夜明けに寝床を抜け出し、埠頭へ向かい、Worejabato が乗ってきたアウトリガー・カヌーを漕ぎ出す。埠頭を少し離れたところに浮かぶカヌーの上で Jebuki は息絶えているのが見つかる。カヌーを漕ぎ出す Jebuki の姿には、ビキニに帰還した島民が残留放射線の影響で健康を蝕まれていることが明らかになり、再び離島することになった 1978 年に、最後まで島を離れることを拒否していたビキニの老人 Andrew Jakeo がボートに乗らず、自分のアウトリガー・カヌーを漕ぎ出し、避難船に向かったという人々の記憶に残る出来事が重なる。Andrew Jakeo がカヌーでビキニ島から漕ぎ出した最後の島民[30] であったのに対し、Jebuki はカヌーでその遠い故郷ビキニ島への帰還をめざすかのように海に漕ぎ出す。

4. *Jilel: The Calling of the Shell*

気候変動をテーマとし、“A Global Warming Fairy Tale”と謳われる *Jilel: The Calling of the Shell* (2014) は、海辺の墓地を波が侵食するさまを少女 Molina が祖母と共に見つめる場面から始まる。祖母から魔法の貝殻を継承した Molina が、紆余曲折を経て、貝殻を取り戻し、合衆国大統領にメッセージを添えて貝殻を贈るという物語である。表題の Jilel（マーシャル語で螺貝）は、少女の祖母が首長であった先祖から受け継いだ魔法の力をもつ貝殻で、祖母は孫娘に Jilel を手渡し、貝殻がお前にその力を語ってくれると言い残して息を引き取る。

親友 Samson と一緒にタクシー業を営む Molina の兄 Ketowate (Niedenthal の息子が演じる) は、金目のものがないか家のなかを物色し、妹の部屋で見つけた貝殻を、祖母の形見であると知らずに、タバコ 4 本と引き換えに売ってしまう。貝殻を家から持ち出そうとした瞬間から、Ketowate はすべてのことがうまく行かなくなる。まず商売道具の車が、次に携帯電話が動かなくなり、魚も釣れない。恋人にも愛想をつかされた Ketowate は、喧嘩騒動で留置所へ入れられ、母親は失業した息子に教会の芝刈りのアルバイトを見つけるが芝刈り機も動かず、海岸の祖母の墓は大波で崩れてしまう。Ketowate はようやく貝殻を探そうと決意するが、貝殻はすでに次から次へと人の手に渡っている。この貝殻には人の所有欲をそそる力があり、Molina 以外の人間がそれを見て手にとり所有 (possess) すると魔力にかかり (possessed)、その人の所有する車が動かなくなり、家の電気が消える。[31] 呪術師 Lijimu の助けで貝殻を取り戻した Molina は、手書きの手紙（“Dear Mr President, We love our Islands. They are all we have. We don't want to lose them!”）（写真参照）を添えて貝殻を国際小包で米国大統領に贈る。貝殻は力を発揮して、全米が停電で車や交通機関は動かなくなり、さら

[29] ロンゲラップの西に大きな明るい光（ブラボ実験の核爆発）を見た日の夜、母親と浜辺でコオロギの音を聞くが、その夜遅くに聞こえたのは人々の泣き声だけだったと Jebuki は語る。
[30] 前田哲男『棄民の群島』p.236 の Andrew Jakeo とアウトリガー・カヌーの写真を参照。
[31] 呪術師 Lijimu も一瞬、貝殻 Jilel を手にとり魅了されるが、Molina が貝殻をホワイトハウスに送るのを助ける。

に魔法の波は世界に広がりマーシャル諸島にも届く。そして使命を果たした貝殻はやがて自ら Molina の手のなかに戻ってくる。この作品は Niedenthal が述べるように Fairy Tale に過ぎないが、貝殻の魔力で世界に広がる停電の波は、大量の温暖化ガスを排出する先進国のメトロポリスの中心から気候変動に対する取り組みがなされたら、その波は世界に広がるというメッセージのアレゴリーにもなっている。[32]

Jilel: The Calling of the Shell は、2015 年 5 月にハワイの Big Island Film Festival で Barbara Award を受賞し、同年 8 月の米国ワシントン州で開催された Columbia Gorge International Film Festival でも International Feature Award を受賞した。[33] 映画の最後には、マーシャル人の詩人 Kathy Jetñil-Kijiner の "Tell Them"[34] という詩のパフォーマンスが織り込まれている。この詩は、手製のバスケットにマーシャル諸島のイヤリングと手紙を入れてアメリカの友人たちに贈り、これを身につけて出かけ、人に尋ねられたら、それがマーシャル諸島からの贈り物であること、世界で最も優れた航海術を誇り、巨人のバスケットからこぼれた島々[35]であること、この諸島が現在、気候変動の影響にさらされ、海が島の墓地を侵食し、防波堤や私たちの家に押し寄せていること、私たちは島を去りたくはないこと、島を失うと何も残らないことをアメリカの友人たちに伝えてほしいという内容の手紙となっている。この詩はマーシャル諸島から米国在住のマーシャル人への行動を呼びかけるメッセージでもあり、自らマーシャル諸島の外の世界にメッセージを伝える詩人としての決意表明でもある。詩人の声を内包するこの映画は、マーシャル人コミュニティという枠組みを超えて、広く世界の人々にその声 (wave) を届けることに成功している。

2013 年のグアム国際映画祭で受賞し、2019 年の山形国際ドキュメンタリー映画祭でも上映された短編映画 *Zori* もまた、エコロジーに関連する作品だが、この短編では祖母と孫の少年の関係がテーマになっている。呪術師 Lijimu 役で知られる Netha Gideon が、この短編では普通の祖母役として登場する。寝坊してゴムぞうりを犬に持っていかれた少年が、ぞうりを見つけるまで帰ってきちゃいけないと祖母に叱られ、アイスクリームを買ってもらうため一日かけて歩き回り、ゴミを拾い集める清掃ボランティアをする。道路脇に落ちていたホイールカバーとモップの棒を古代戦士の盾と槍のように構えて、最後には使い古されたゴムぞうりを道端で見つけ、両手いっぱいのゴミや拾い物を抱えて家に戻った少年が祖母を見あげるまなざしと、一生懸命働いた少年を愛情いっぱいの満面の笑顔で見つめる祖母のまなざしで映画は終わる。ものを大切にする精神とこわいけれども優しい祖母と少年との絆を描くこの作品は、日本人にもどこか懐かしい感じのする映画である。

---

[32] Niedenthal は貝殻と DVD を在任中であったオバマ大統領に贈ったが返事はなかったという。
[33] ワシントン州での上演では 15〜20 人の米国在住のマーシャル人を含む 120 人のアメリカ人の観客と熱心な質疑応答が交わされたという。"Jilel: The Calling of the Shell," *The Marshall Islands Guide*, October 25, 2014 (https://www.infomarshallislands.com/jilel-the-calling-of-the-shell/).
[34] *Iep Jāltok*, pp.64-67. Elizabeth M. DeLoughrey, *Allegories of the Anthropocene*, Duke UP, 2019 もこの詩を論じているが、映画 *Jilel* への言及はない。
[35] マーシャル諸島の伝説では島に食べ物を盗みに来た巨人が逃げるときにバスケットから落としたものが島々になったという。

5．*Batmon vs Majuro* とその後の短編映画

Batmon vs Majuro (2016) は Suzzane Chutaro がハワイに移住して Niedenthal との共同監督制作が終わった以降の映画である。Batmon 役を演じる Ben Debrun Wakefield は、マジュロ生まれのマーシャル人、ニュージーランドで中等教育を受け、マジュロの高等学校に進学し、台湾の國立交通大學 (National Chiao Tung University) に留学して、マーシャル諸島の National Energy Office の Deputy Director を務めている。この映画では Niedenthal 自身は前作 *Jilel* での Worejabato (Reef God) の分身という役柄とはうってかわって、Batmon が追跡する Catwoman の手下の Ghurlpower Gang の 1 人（女性メイクのトランスジェンダーの運転手）を演じている。主人公の Batman ならぬ Batmon は、Catwoman に盗まれたバットコプターを取り戻すため、アメリカからマジュロにやってくるが、ことごとく追跡は失敗し、呪術師 Lijimu に助けられるという筋立てである。

アメリカのグローバル企業の莫大な資本と先端科学技術、極限まで鍛えた身体を駆使して悪党を懲らしめるハリウッド映画のヒーローBatman とは対照的に、この映画の Batmon は、ふがいないアンチヒーローである。空港到着時に 4 つのスーツケースが届かず、バットマントをはじめ、あらゆる装備品なしで力を発揮できず、町の子供たちにはからかわれ、その上、Ghurlpower Gang に財布を盗まれて、食べ物も買えない。たまたまタクシーで乗り合わせた呪術師の Lijimu は、無精ひげをはやしてバットマスクをかぶり汗だくで体臭を放つむさくるしい Batmon を「変な外国人」と思い、孫息子 Mook にマーシャル語で散々Batmon の悪口をいうが、タクシーを降りがけに Batmon が飛行機のなかの特訓で覚えたマーシャル語で流暢に話すのを聞いて、どうもマーシャル人らしいのに気づく。その後 Batmon はパンノキ (breadfruit) の葉で覆面した Mook に町で窮地を救われるが、運動不足で肥満気味の Batmon は、4 階建ての建物の屋上まで階段を駆け上ると息切れし、足がもつれてほとんど歩くこともできない。Mook 少年にタクシー代を借りて、Ghurlpower Gang を追跡するが、マーシャル人のタクシー運転手は妻が携帯電話で用事を言いつけてくるたびに Batmon を路上において家に戻らなくてはならず、夜通し闘う Batman と違って、疲労困憊の Batmon は張り込みの途中でいつも眠ってしまい、何度も Ghurlpower Gang をとり逃す。町のカフェで再会した Lijimu がバットマントを渡してくれたおかげで少しは面目を取り戻すが、Batman の形状記憶型マントとちがって空を飛べるわけでもなく、Batmon のマントは見栄を切る道具に過ぎない。セレブ女性たちに囲まれているハリウッド映画の Batman とは対照的に、女性恐怖症の Batmon は、ビンゴゲームに興じるマーシャル人女性たちを見ると、会場に足を踏み入れることすらできず、マントをひるがえして退散してしまう。

Batmon 役はマーシャル人が演じているが、映画の冒頭では Batmon のエスニシティは明らかではなく、映画の進展のなかでマーシャル人化していく。この Batmon のキャラクターには、アメリカに移住したマーシャル人や海外在住のマーシャル人 2 世などの存在が重なる。アメリカの生活に慣れた（あるいはアメリカ生まれの）マーシャル人が帰郷したときに感じるカルチャーショックがほのめかされる。Batmon は少年 Mook に連れられて Lijimu

と対面し、バットマスクをぬいで本来の姿をさらして、助けを求める。Batmon は呪術師 Lijimu がスーパーマンより有能 (powerful) なことを認めるが、Lijimu はこの映画では、伝統的な方法ではなく、携帯電話のスカイプで謎のスピリット Bwiro Libre[36] を呼び出し、Bwiro Libre は Denny's で皿に山盛りのハワイ製パンケーキをほおばりながら、MacBook の GPS でビッグデータを駆使し盗まれたバットコプターの位置を検索する（映像ではアップルのロゴが強調される）。荒唐無稽ではあるが、グローバルなアメリカ消費文化のなかにあるマーシャル諸島の日常を描いている。Batmon は、Microwave Films 制作の節電を呼びかける短編映画 *Energy Heroes* (2018) にも登場する。Batmon 役を演じているのはマーシャル諸島の National Energy Office の職員であり、子供たちと共に Batmon がよりよい未来のために闘うべき社会的正義のなかには climate justice の問題も含まれるだろう。

Batmon vs Majuro の続編である短編映画 *The Batkid of Monkubok* (2019) では、前作で独身だった Batmon はマーシャル人女性と結婚している。バットコプターで妻の実家のイバイ島に到着するが、早口のマーシャル語でまくし立てる妻とは喧嘩ばかりで、引退を決意した Batmon がホテルの路地裏のゴミ箱に捨てたバットマスクとバットマント、手袋の一式を、イバイ島の子供たちが見つけて、Batmon 顔負けのヒーローBatkid になり、金を奪った悪ガキたちを懲らしめて、老人や婦人の手助けをする。Ebeye Hotel やスーパーマケット、古い学校跡の廃墟など、イバイ島を訪ねたことがあればすぐに認識できる場所がこの短編映画でも登場する。Batkid になるマーシャル人少年は金持ちの息子だが、悪ガキたちに奪われたお金をとり戻すと、それを分配する。フェリーで 20 分のクワジェリン島の米軍基地で働くマーシャル人や米軍のミサイル実験場となったミッドコリドー地帯 (Mid-Atoll Corridor) からの強制移住者、核実験で故郷の島から移住したマーシャル人など、約 0.36 平方キロメートルの細長い島に 9,614 人 (EPPSO 2011 Census) を超えるマーシャル人が居住するイバイ島では、クワジェリン島の米軍の学校に孫を通わせている首長（イロージ）の家族の立派な家もあれば、建て替えが計画されている古い住居群もあり、経済格差は大きい。

かつてはミッドコリドー地帯からの強制移住者の生活環境がとくに悪いことが問題になっていたが、[37] 現在は強制移住者地区のなかでも古い地区の居住者と、サイクロンで海側の居住の一部が被害を受けた後、新しく再建された地区に居住する家族の間でも、格差がある。筆者が 2019 年 3 月に訪問したイバイ島の学校で教えていた若い女性教員の父親はミッドコリドー地帯からの強制移住者 2 世で、クワジェリン島で技師としてよい給与を得ており、この新しく再建された居住地区に住んでいた。イバイ島では多くの家庭が週 2 回の公共の水道で提供される水を汲みにきており、クワジェリン島にフェリーで洗濯物をもっていく家族も多いが、新しい住居は水の供給も問題ないらしく、洗濯機が回っていた。[38] し

[36] Bwiro はパンノキの実を発酵させてつくるマーシャル諸島の伝統的な保存食。Bwiro Libre が好むのは bwiro でなくパンケーキである。*Ña Noniep* に Lijimu が bwiro をつくる場面がある。
[37] 中原聖乃・竹峰誠一郎『核時代のマーシャル諸島』凱風社、2013 年、p.149 参照。
[38] ミッドコリドー地帯からの強制移住者地区では自己負担は電気代のみで、区画内の住居に任意で手を加える場合は自己負担である。

かし、通りを挟んで向こう側には、家のなかにトイレのない古い住居群があり、道路沿いに設置された世帯ごとのコンクリート製トイレブースの集合棟の多くが機能していない。*The Batkid of Monkubok* の短編映画では、このようなイバイ島の詳しい光景は見えてこないが、Batkid とそのとりまきの少年たちの間の社会的格差はその現実の一部である。

6．おわりに

以上みてきたように、Niedenthal はアメリカのグローバリゼーションの経済文化の影響を受けるマーシャル諸島の日常生活を描き、マーシャル諸島の核軍事化の現在も続く影響や、気候変動など、社会的なテーマを長編と短編の映画で問いかけ、国内のそして国外在住のマーシャル人コミュニティに、またその外の世界へ発信している。Niedenthal の映画に登場するマーシャル人家族は、物質的にめぐまれたアメリカ的な生活への志向と伝統的な価値のはざまにあり、映画には、社会的弱者や抗えない力に翻弄されて悲しみや苦悩を抱える個人に対するやさしいまなざしが見られる。アメリカ人でありながら、人生の半分以上をマーシャル諸島で生き、ビキニ環礁に出自をもつ人々とその子孫のコミュニティと深い関わりをもってきた Niedenthal の映画作品は、*Jilel* の制作に関するコメントで Nidenthal が述べたようにまさに「マーシャル諸島に対するラブレター」（注33 文献）であり、人種や民族、被害と加害の関係を超えて向き合う可能性を示唆している。

引用文献

Ainikien Jidjid ilo Boñ: The Sound of Crickets at Night. Directed by Jack Niedenthal and Suzzane Chutaro. Microwave Films, 2012.

"Andrew Jakeo, the Reluctant Elder of Bikini Atoll." *Pacific Island Monthly*, vol. 49, no. 11, 1 Nov. 1978, pp. 11, 20, https://nla.gov.au:443/tarkine/nla.obj-335799066. Accessed 31 March 2021.

Batmon vs Majuro. Directed by Jack Niedenthal and Suzzane Chutaro. Microwave Films, 2016.

Energy Heroes. Directed by Jack Niedenthal and Vivian Koroivulaono. Microwave Films, 2018.

Jetñil-Kijiner, Kathy. *Iep Jāltok: Poems from a Marshallese Daughter*. U of Arizona P, 2017.

Jilel: The Calling of the Shell. Directed by Jack Niedenthal and Suzzane Chutaro. Microwave Films, 2014.

Lañinbwil's Gift. Directed by Jack Niedenthal and Suzzane Chutaro. Microwave Films, 2011.

Ña Noniep: I am the Good Fairy. Directed by Jack Niedenthal and Suzzane Chutaro. Microwave Films, 2009.

The Batkid of Monkubok. Directed by Rolandson M. Samson and Jack Niedenthal. Microwave Films and Monkubok Productions, 2019, https://vimeo.com/343968236. Accessed 31 March 2021.

Yokwe Bartowe. Directed by Jack Niedenthal and Suzzane Chutaro. Microwave Films, 2010.

Zori. Directed by Jack Niedenthal and Suzzane Chutaro. Microwave Films, 2013, https://www.youtube.com/watch?v=9QESPfd3pWw. Accessed 31 March 2021.